

小林昌二 「国史跡指定答申なった八幡林官衙遺跡」

田中 靖 「八幡林遺跡の概要」

坂井秀弥 「古代越後平野の環境・交通・官衙」

佐藤 信 「郡符木簡と封緘木簡」

平川 南 「八幡林遺跡と地方官衙論」

長野特別研究集会（一九九八年六月五・六日）

シンポジウム「七世紀の社会と木簡―屋代木簡をめぐる―」

寺内隆夫 「信濃の古代と屋代遺跡群」

傳田伊史 「七世紀の屋代木簡」

鐘江宏之 「七世紀の地方木簡」

鶴見泰寿 「七世紀の宮都木簡」

館野和己 「律令制の成立と木簡」

編集後記

本年は木簡学会設立から二〇年めに入り、長野特別研究集会、屋主家木簡シンポジウム、そして木簡図録の刊行と、記念事業が順次実現・計画されている。『木簡研究』も二〇号を迎えた。一九七九年に創刊号が世に出てから、本誌の編集を支えてこられた先輩委員のご労苦に、改めて謝意を表したい。

本号は計七〇件の事例報告、論文、書評に加え、長野集会の記録も収載し、初めて三〇〇頁をこえる大冊となった。幸い編集は順調に進んでいる。幹事諸氏の作業分担のお蔭である。殊に、奈文研の渡辺晃宏氏の「快刀乱麻」のご活躍は編集者の鑑と感じ入っている。

誌面の改善策として、新たに「釈文の訂正と追加」欄を設けた。

研究の進展などで判明した訂正を要する箇所を、正確な釈読によって再度報告する趣旨をもつ。ところで、二〇年間で木簡の出土は約六〇〇遺跡、約一八万点と、質量共に拡充した。本誌はこれまで全ての木簡を地域順に掲載してきた。しかし、古代・中世・近世各時代の木簡が充実し、機能の差異が明らかになるにつけ、木簡学の進展のためには、時代毎に分類する方が良くと痛感するこの頃である。最後になったが、ご多忙の中、貴重な最新情報をご執筆いただいた方々に、心からお礼を申し上げます。

（清水みき）